

初めて英語で書かれたベルニーニの伝記

ローマのナヴォーナ広場の《四大河の噴水》、サンタ・マリア・デッラ・ヴィットーリア教会の《聖テレジアの法悦》。サン・ピエトロ広場のコロンナート、そのほか数多くの優れた彫刻と建築物を生み出したジャン・ロレンツォ・ベルニーニは、カラヴァッジオに次ぐ人気を誇る、ローマが生んだバロック芸術の代表的な巨匠である。毎年、何百万もの観光客がローマやその他の土地を訪れては彼の芸術に触れ、それらを称賛している。彼ほど、巨大で永続的な、そして芸術が与えてくれる喜びに満ちた足跡をローマに残した芸術家はいない。西洋美術の歴史のすべての時代を通じ、ベルニーニはカラヴァッジオをはるかに凌いで、最も影響力を持った芸術家の一人に数えられている。

だが、その作品の持つ影響力と人気にもかかわらず、人間としてのベルニーニについて知っている者はあまり多くない。これはなぜだろう。その理由は、近代以降の著作に「ベルニーニその人」に関する記述を発見することができないからだ。さまざまな言語で書かれた膨大な資料も、彼の私的な生活や個人的な交流に注意を向けているものは少ない。現在の（あるいは少し前の）ベルニーニに関する文献を読んでもみれば、それらがほとんど彼の芸術作品や建築、彼の演劇の説明、そしてその他の客観的な履歴

に集中していることに気づくだろう。まるで彼の人生とアイデンティティがそうした事実の総計であり、ベルニーニという非凡な人間と、一時代を画する彼の芸術作品を理解するには、それらを知るだけで充分であるかのようだ。だが、そうではない。

ベルニーニの人生や芸術家としての経歴を紹介しようとする一般向けの書籍も、多かれ少なかれ、彼の作品の技術的な面を年代順に記し、伝記的事実を少々添え、社会的文脈をそこかしこに挟んでいるだけである。最近、イタリア語とドイツ語による彼の伝記の執筆が試みられたが、それらもさほど詳しいものではない。確かに、一次資料（これには彼の生前と死後しばらくしてから刊行されたイタリア語による「公的」な伝記も含まれる）からベルニーニという人間を知ろうとすることはきわめて難しい。なぜなら、これらの資料は、そもそも人間としてのベルニーニに興味を持っていないか、もしくは前述した二つの伝記のように慎重に作成され、理想化され、それゆえに個性を奪われたベルニーニのイメージを伝えようとしているからである。その一方で、十七世紀に刊行された伝記（これらの伝記からベルニーニに関する多くの情報を得られるのは事実だ）は、「天才ベルニーニ」、つまり神に類するような靈感に満ち、伝説的で、人間には避けられない欲求や衝動、欲望を超越した人間という神話を広めようとしているのだ。

さらに、自己防衛にたけていたベルニーニは、無用な危険を冒すことを避け、最も無難な話題についてしか見解を口にせず、自分の意見、ましてや個人的な生活に関する事実を紙に記したことなどなかった。それでも私たちは、公式な伝記やさまざまな一次資料（日記、私信、アツヴィーゾと呼ばれる速報

記事、外交文書)などから、より真実に近い、明瞭な人間像を描き出すことができる。もちろん、時には探偵のように、こうした古い文書から真実を得るために言外の意味をくみ取らねばならないこともある。

本書は「ベルニーニその人」、つまり検閲を経ない、血と肉を備えた人間を描くことが主要な目的ではあるが、彼の職業生活における画期的な事件や家族の歴史についてもページを割いている。したがって本書は英語で書かれた初めてのベルニーニの伝記であると同時に、ベルニーニがこの世を去った一六八〇年以降に書かれた、数少ない彼の伝記のなかの一冊だと言える。一次資料がベルニーニの私生活についてほとんど沈黙しているのを補うために、他の資料から、十七世紀のイタリアを生きた人びとの日常生活や、そこに生きる人間の世界観と精神構造を探り、彼の家族構成、当時のイタリアの都市での生活、経済活動、宗教、政治の再構成を試みている。ユニークで革新的なヴィジョンを持った芸術家ベルニーニは、同時に、歴史上のある時点と空間に生きた人間でもあった。そのため、この伝記は、彼を含む十七世紀のローマ人の生活に、間接的であっても影響を与えた大きな出来事や社会問題、人物についても言及している。これらから読者は、バロック・ローマの日常生活や政治について多くを学ぶだろう。教皇ウルバヌス八世が述べた有名な言葉「ベルニーニはローマのために作られ、ローマはベルニーニのために作られた」の通り、ベルニーニの生涯は、彼の愛したローマという都市と密接に関わっていた。したがってこの伝記は、ベルニーニという芸術家の伝記であるばかりでなく、十七世紀のローマの肖像でもある。

だが本書は、ベルニーニが作り上げた素晴らしいさまざまな彫刻、建築、絵画、そして演劇を無視するものではない。彼の想像力から直接生み出されたこれらの作品も「ベルニーニその人」を物語る材料であり、芸術家としての彼が達成した、最も意義深い、不朽の業績である。だが私は、ベルニーニという芸術家の作り上げた作品と、彼という人間の間に、はっきりと限定された結論を導くことは避けた。こうした行為は、どのような芸術家に対しても、あまりにも危険で不確かな推論である。それと同時に、私はベルニーニの個々の作品に関しては記述を制限し、それらの起源や制作に関する最も本質的な歴史的事実を示すにとどめた。ベルニーニの作品についての詳しい描写や考証は、彼に関する他の著書、つまり私が注や参考文献のリストに載せた本で読むことができるからである。

本書は専門書とは違ったわかりやすい文章で書かれており、読者に芸術の専門的知識やヨーロッパの歴史についての詳しい知識を求めものではない。注釈は最小限にとどめたが、ベルニーニの人生に関する歴史的データやすべての引用は出典を記した（より知られていない歴史的データについても出典は記している）。本書は、ベルニーニの人生に向けた十年にわたる絶え間ない研究と、バロック・ローマの研究に捧げたさらに多くの年月の結晶である。この研究の最初の果実は、ベルニーニの末息子ドメニコが執筆した父の伝記の英訳である。これには多くの注を付した。この伝記は、一七一三年に刊行されて以来、一度も翻訳あるいは再版されてこなかった。また、ベルニーニの人生のすべての局面、すべての年を精査するうえで、それより後に出版された二次資料にあたるのではなく、常に十七世紀の一次資料を見返すようにした。本書に記された多くの情報は、閲覧するのが難しいか、あるいは研究論

文や學術誌の脚注という迷路に紛れてしまうような、あまり知られていない新旧の資料から抽出したものである。

こうした理由から、より専門的な知識を求める読者は、本書を興味深く、有益だと感じるだろう。本書は、これまでベルニーニに関する著書を書いた人びとが無視してきた問題に触れているばかりでなく、最近の、それほど広く知られていない発見をも記している。最近の数十年にわたる研究をまとめ、事実を更新することで、長い期間にわたって信じられ、繰り返し語られてきたベルニーニの伝説を覆すとともに、彼の人生と業績をひも解くことで知識の欠けている部分も埋めている。

最後になるが、ベルニーニの生涯は、これまで厳密で率直な伝記の対象にされてこなかったため、一般の人びとは彼の人生が退屈で平穩無事なものだったと考えているようだ。だがこれほど真実から遠いものはない。これから本書を読む読者は、その人生が、スキヤンダル、陰謀、そして私たちがテレビのメロドラマで目にするようなさまざまな人間関係のドラマに溢れた、常に愛すべきとは言えなくても、実に興味深い人物について多くを知ることができるだろう。パロック・ローマの芸術家のなかで、激烈な気性を持ち、反社会的、いや犯罪的とさえ言える行動に身を任せたのはカラヴァッジョだけではない。読者よ、ご用心を。

目次

序文——初めて英語で書かれたベルニーニの伝記	iii
謝辞	viii
パロック・ローマにおける貨幣価値、賃金、生活費	xi
略記	xv
第一章 ナポリ生まれの神童	I
懐妊した十二歳の花嫁	
この伝記の資料について記すために一息いれよう	
「悪魔の棲む楽園」での幼年時代	9
一六〇六年、ローマへの移住	17
少年ベルニーニに魅せられる	23
「頼むから、本音を隠してくれたまえ」	43
成人したベルニーニ	52
「シピオーネ枢機卿のあそびが、欲しいものを手に入れてなぜ悪い？」	59
優しさと真実と	65
歓喜するベルニーニ	77
	91

第二章 至高のインプレサリオ

美髯のウルバヌス

「彼の時代のミケランジェロ」

火は決して制御しやすいものではない

「^{バベル}蛮族がなしえなかったことを、バルベリーニがやってのけた」

「クーポラが落ちる！」

一族の長

死との遭遇

愛人の顔を切りつけさせたベルニーニ

ベルニーニが花嫁を娶る

「偽物を本物に見せる」

イングランドにまで伝わった名声

誰がために鐘は鳴るのか、それとも鳴らないのか

第三章 ベルニーニの苦悩と恍惚

「かくも粗野で見苦しい教皇」

ベルニーニは沈み、聖テレジアは浮揚する

「力を失ったばかりでなく、自分を卑しめて」

「何か途方もないものに心を動かされない限り」

ラ・ピンパッチャが救いの神となる

臆病そうな公爵の英雄的な胸像

教皇の遺骸は腐敗するまま放置される

第四章 ベルニーニと教皇アレクサンデル七世

教皇と建築家というドリーム・チーム

「皆の噂によると、彼女は両性具有者だそうだ」

「またも襲った黒死病」

イエズス会の宝石

ベルニーニとポツロミーニのライバル関係の最終章

363 347 339 325 291

291

第五章 ルイ十四世の宮廷におけるローマの芸術家

国際政治の駒として翻弄されるベルニーニ

椅子駕籠に乗せられてアルプスを越える

「小さい話などしないでいただきたい！」

「すすり泣くベルニーニ」

「あいつは疫病に襲われるがいい！」

長く、厄介な余波

424 417 406 395 384 367

367

第六章 「我が名声は衰えてゆくだろう」

しばしの安堵の溜息

カサ・ベルニーニに対する投石

彫像の蔭のソドミー

「すべての方向に毒を吐く龍」

クリステイーナ女王が窮余の策に一役買う

481 471 458 441 433

433

訳者あとがき

ときおりの称賛

「あの乳房を覆え！」

「クーポラが（またもや）落ちる！」

華々しくはなく、消え入るように

507 504 497 487

525

参考文献

原注

索引

1 22 47